

血液疾患におけるバイオマーカーとしての血漿中ヒストン値の検討

最近の研究により、炎症と止血機構(凝固)には深い関わりがあるということが分かってきました。血液疾患の患者さんでは、血液疾患そのものによる免疫の低下や、治療の影響による免疫の低下の結果、感染症を起こしやすい状態にあります。感染症により体の中で炎症がおこると、感染の原因となる微生物を封じ込めるために、細胞から核の一部が放出されて微生物が体中に広がるのを防ぐ一方、血栓が生じて、血栓症の原因となることが分かっています。

また、血液疾患では、感染が起こってなくても、様々な原因により血管の細胞に炎症が起きやすく、この結果、播種性血管内凝固症候群や、血栓性微小血管障害症といった病気に代表される小さな血管の血栓症を引き起こし、臓器の重大な機能低下を来すことがあります。

炎症によって細胞から放出される核の一部がヒストンであり、悪性腫瘍や、心筋梗塞、脳卒中、感染症、外傷、自己免疫疾患といった、炎症や血栓症を起こす様々な病気で血液中のヒストン値が上昇していることが報告されています。

血液疾患の一部でもヒストン値の上昇が報告されていますが、血液疾患の中で具体的にどの病気でヒストン値が上昇しているか、また、治療に伴ってヒストン値がどのように変化するかなど、詳しいことはまだ分かっていません。

そこで私たちは、血液疾患の患者さんの血液とカルテに記載されている病状や他の血液検査結果に関する情報を分析することにより、どのような血液疾患においてヒストン値が上昇しているか、そして、炎症や血栓症を合併した際に、治療によってヒストン値がどのように変化しているのかを明らかにしたいと考えています。この研究により、炎症や血栓症を合併した血液疾患の患者さんに対する早期診断に役立つのではないかと考えています。

本試験は、国が定めた「臨床研究に関する倫理指針」を遵守し、当院での臨床研究倫理委員会（臨床研究の実施または継続について、倫理的観点及び科学的観点から調査及び審議する委員会）においてその科学性・倫理性について厳重に審査され、病院長の承認を受けて実施されます。